

第7分科会

「聴覚障害児の発達を考える」

共同研究者 特定非営利法人 つくし 副理事長 渡邊 健二
助言者 京都府聴覚障害者協会 事務局長 内川 大輔
司会者 聴覚・ろう重複センター 楓 長谷 きよみ
京都市聴覚言語障害センター 加藤 貴雄

〈1日目〉

討議の柱の確認

昨年度のまとめをもとに、以下の4つを今年度の討議の柱として確認した。

- 1 児童の発達保障
- 2 障害の多様性への対応
- 3 ネットワークづくり
- 4 社会（法律、制度など）の動き

報告されるレポートの内容は、討議の柱に沿ったものであるため、レポートを深める中で、討議を進めていくこととなった。

各地域の情報交換

開始に当たって、参加者から分科会に参加した理由などをそれぞれ発表した。事業所を立ち上げ予定の地域から、情報を得たいなど、事業所の立ち上げに関する声が多かったことを受け、京都市の事業所立ち上げまでの経過と現在の事業の概要について報告してもらい、事業所運営や企画内容、対象者などに関する質問をきっかけとして各地域の情報交換をおこなった。

1日目のまとめ

共同研究者より

事業所の立ち上げにあたっては、まず

聴覚障害児の実態調査が必要である。要求にもとづいた事業展開が何よりも必要であると同時に、事業所としての方針や理念を持っておくことが必要となる。

また、聴覚障害児の集団作りを大切にしてほしいと思う。その意味では、重複障害であっても参加できるということも考えてほしい。これらのことを、事業所づくりに取り組んでいく地域は参考にしてほしい。

〈2日目〉

レポート報告の概要

(1)「手と手の広場 ことばと人間関係の支援」

放課後デイサービス 手と手の広場
高野 清美

放課後等デイサービス「手と手の広場」より1人の自閉症児に焦点を絞り、通所を通して見えてきた、スタッフや友達に対する対人面での距離感の変化、また言葉の習得の変化について報告された。スタッフが自閉症児への対応を学び接するなかで、語彙が増え自分の周りの人間への興味が徐々に深まってきているとのレポート報告だった。

質問として、単語から文章への学習方法や家族、学校でのコミュニケーション

について、発達診断などが挙げられた。

学校では出来ないことを放課後等デイサービスで支援していくことの大切さ、放課後等デイサービスの目的、学校の目的が何であるのかをしっかりと持つことが大切であることの確認がされた。

(2)「学校との連携、家庭との連携」 京都聴覚障害児放課後等デイサービス 「にじ」

木瀬 歩

放課後等デイサービス「にじ」より家庭、学校との連携について報告がされた。課題としては、学校と協力するべき子どもが多いこと、子ども達の教育環境はあまり変わっていないことが提起された。

保護者会について、にじ設立前の学校との関係作り、学校ごとに連絡会議をしているのかなど、ネットワーク作りに関する質問が多く出された。

ネットワーク作りで大切なことは、福祉の立場として教育の立場、医療の立場等に対し自ら共通課題を提起しつつ、それぞれの専門性を踏まえた解決策を一緒に考えていく姿勢が大切であると確認した。

(3)「『聴覚障害児及び保護者サポート事業』から見える福祉での役割」

滋賀県立聴覚障害センター

安井 悠子

滋賀県立聴覚障害者センターから「『聴覚障害児及び保護者サポート事業』から見える福祉での役割」と題して、人工内耳など聴覚障害児教育の多様化など保護者の不安や悩みなど様々な相談が寄せら

れた結果、助成金で聴覚障害児クラブ（クローバークラブ）の設立に至った経緯の報告がされた。設立後当初は利用者の人数が少なかったが小児医療センターへの周知によってクラブへの参加者、保護者同士の交流が増えていったこと、医療関係者も困っていることが分かり、福祉の役割は医療・教育にはない場所を作ること、交流の場、学べる場、共感できる場をつくることが大切とのことだった。

参加者からは、事業内容に関する質問が出された。県の事業として運営しているため、当事者が関わっていること、意見交換の場が用意されていることが特徴である。

レポート報告を受けて

助言者より

医療・教育・福祉の連携の目的をしっかりとわかっておくことが大切であり、将来の自立など子ども共通の課題、見て通じるという聴覚障害特有の課題がある。その両方の視点が大切であると思う。

共同研究者より

レポート発表の中に今後生かしていただける多くのヒントがあったと思う。私たちに出来ることの一つは、情報提供である。また、医療・教育・福祉の連携で大切なことは、子どもがそれぞれの場所で安心できることであると思う。

討議

京都南部地域の聴覚障害児支援からの活動報告と呼びかけについての課題提起があり、教育委員会などとの協力についてなど、意見交換を行った。

これから放課後等デイサービスを立ち上げていく地域からの意見として、様々なところから放課後等デイサービスを立ち上げて欲しいという声があり、その中の細かなニーズや意見をまとめている状態であることが報告された。各保護者の全てのニーズに応えることは難しい、事業所を立ち上げる目的は保護者が仕事をするためではなく、子どもの自立のためであることの確認がされた。

運営に関しては、家族も一緒に考えていくことも大切なのではないか。保護者会などの自治組織があってもよいのでは、という意見が出された。また、立ち上げに関わり苦労を経験した保護者と事業所があることが当たり前という新規の利用者の保護者たちとの温度差についてや、子どもたちの自治組織はどの事業所もないことなどネットワーク作りの討議、現状報告がされた。

ほかには、難聴クラスの設置などで聾学校に通う子どもは減少しており、アイデンティティに対する懸念が挙げられ、聴覚障害児が集まる場（集団の場）は大切であることの確認がされた。

最後に確認されたこととしては、近年放課後等デイサービス事業所が増えている中で、1番大切なことは、専門性であること。ただ集まれば良いということではなく、私たちがどのような役割をしていくのかということがそれ以上に大切であるのではないか。専門性について、事業所としては方針をしっかりと持っていることが重要である点であった。

全体のまとめ

聾学校の子どもたちにとっては交流の場はとても大切であり、繋げること、色々なコミュニケーション方法があるということ子ども達が知っていくことも大切なことである。

最近では中身のない事業所もあり、国としては検討委員会を立ち上げる予定であるなど制度、社会の動きを見ることがこれから必要なことである。

聴こえない子どもの「専用」ではなく、「専門」が必要と社会に対して訴える力を持つことが大切である。